

青年の元気で奮闘する我輩の一日

大隈重信



境遇に応じ規律ある生活を必要とする

一日の生活をするにしても何時に起き、何時に食事をなし、何時に訪問者に接し何時から人を訪問するという様に規律正しくしている人もあるが、我輩の様に幕末時代から明治にかけての、非常な場合に於て働かねばならなかった者は、朝の予定と夕の實際とまるで変る様な生活をして来たので、そういう習慣が第二の天性となつて、今日でもあまり予定を立てた生活することは遣らないのである。例えば軍人が戦争をするにしても、地図の上で決めた作戦計画通りの戦闘をすることは少のうて、多くの場合は不意に起つて来るところの戦い、即ち遭遇戦というものの方が多いのである。人生もまたこれと同じ様に、多くの人の生活には不意の出来事の方が多いのである。そこで實際生活に必要なことは、如何なる不意を喰つてもこれに狼狽しないだけの心胆を鍊つておくことであると思う。その方法は今日の学者、宗教家、教育家の言つているところの形式ばかりの修養というものでは駄目だと思ふ。彼等は口先

ばかりで豪(えら)そうなことを言つて、その生活はむしろその言ふところの反対を行つているのが少なくない。

我輩の實際からいふと、整然たる理窟の立つた生活を云々するより、真面目に努力する生活の方に力があると思ふ。しかし時勢が益々進化して、秩序と平和とが保たれる様になれば、従つて国民の生活も秩序ある規則あるものとなつて行くべきは勿論である。要するに初めからきちんとした箱詰めの様な生活を真似るよりも、境遇に適應した活動をしてそこに規則のある生活を造ることが必要である。

い 我輩の元気は今日でも青年と異ならな

右のようなことで我輩は、とりとめて言うほどの規則のある生活はしていないが、それでも毎日の生活の概略を言ふと、まず起床は夏であれば五時、冬になれば六時となつていゝ。面を洗い全身の冷水摩擦でもすると、体中の血液は漲り溢る様な

爽快を感じることは、今日も青年時代と少しも異なるところがない。この元気で庭園を散歩しながら、好きな植木や盆栽の手入れや農園の指図などをする。朝飯がすめば多くの訪問者に接したり、大学やその他のことのために働く様になつてゐる。

我輩の主義として、訪問して来るほどの人には事情の許す限りは面会することとしている。それで老人も来れば青年も来る、貧乏人も来ればまた若い婦人も来るので、昼間は新聞を見る暇さえない。その代りに夜は土地が辺鄙へんびなので滅多めったに訪問客もないから、四時間ぐらゐは自分の時間として、新聞雑誌や纏まとつた読書も多くこの間にする。時によると何かの必要で調べものをすることもある。

希望ある者は決して老いるものでない

我輩の百二十五歳の長寿説を不思議がる人もあるが、決して不思議なことではない。人間は世のためとかまたは人のためとかに何かして働こうという代り、もしも人生に希望さえあれば老朽者となる恐れ

はない。その代りもしも人生に希望がなくなると生きていくほど辛いものはない。このことは世界の自殺者の中でも最も多数のものは老人、即ち人生にんならの望みのない憐れなる人達であることを見ても判る事実である。

世にも憐れなものは徒いたずらに長生きするだけで少しも希望もなければ、奮闘する勇氣もない老人である。なんだかだと豪えらがつても、愚痴や不平を言う様になつては人生もはや駄目なものである。そういう老人はむしろ早く死んだ方がお互いに仕合せかも知れない。昔は信州の姥捨山うばすてやまに老人を捨てに行つたそうであるが、今日でも徒に厚顔年ぬすを偷む老人輩をばなんとか始末する必要もあろう。

愈々敗るれば益々奮闘努力を続行する

我輩は何時いつでも、人にできないようなことを自分で一つ遣やつてみたいという希望を持つてゐる。そのため今日までも大分失敗したこともあるけれども、失敗したからとて断じて事を廢する様な意気地

のない振舞ふるまいをしたことはない。何時でもいよいよ失敗すればいよいよ奮闘努力を続行する。而してしかこういう場合に更に新しい元氣を得るには、どうかして我輩の一生を最も有益に送りたいという希望のあるためである。苟いやしくも社会に立つて何事かを成そうというほどの人である以上、一度や二度の失敗で悲観する様なことのあるはずがない。もしそういう人があるならば共に人生を語るに足るべき人とは言えない。かくの如き精神を持つているので、如何なる場合でも我輩の生活は常に希望が輝いている。従つて我輩は何時も愉快に樂天的でいることができる。同じく人生に処する上は、なるべく有為の生活を成すべく長く送ることが必要である。それにはどうしても道理想にかな適うところの生活が必要である。我輩の長寿説になにほどの科学的の根拠がある点れば、それは倫理的道德的生活と結び付いている点であろう。然るに今日しかの富豪などの中には、生きながらに地獄の苦悶をしているのが決して少なくはない。彼等の生活にはなんら道德上の安心がなく、良心の満足し得るほどのものを持っていないからで

ある。従つて彼等が長生ちやうせいするには、苦悶の時を長からしむるまでのことで、祝すべきことではない、むしろ憐れむべきものである。

底本：「大隈重信演説談話集」岩波文庫、岩波書店

2016（平成 28）年 3 月 16 日第 1 刷発行

底本の親本：「現代青年に告ぐ」大盛堂書店・城北書房

1919（大正 8）年 3 月 25 日発行

※本文冒頭の編者による解題は省略しました。

入力：フクポー

校正：門田裕志

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。